

「助産師」

菅沼

SUGANUMA
Hironi

弘美

体重測定の実績付けが
栄養改善の糸口

「お産があり、母と子、そして家族の暮らしがある。世界中に共通するこの神秘にひかれたんです」。そう語る菅沼さんは、大学で助産学を専攻して助産師・看護師・保健師の国家資格を取得した。卒業後は総合病院に約3年間勤務。その後、新たな世界に挑戦するため、青年海外協力隊に応募した。

2015年10月、菅沼さんはアフリカ大陸南東に浮かぶ島、マダガスカルに降り立った。配属先はマジンガ郡の村落部にある20の基礎保健診療所を管轄

JICA Volunteer Story

PROFILE

新潟県出身。都内総合病院の産婦人科や小児病棟などで勤務し、へき地医療支援も経験する。2015年10月から青年海外協力隊（助産師）としてマダガスカルで活動中。



体重測定後にフィードバックと栄養指導をする菅沼さん。学童期の子供を含め、地域住民に家族計画や家計管理についても働き掛けることで、包括的な栄養改善を目指している

「一人でも多くの住民に、少しでも多くの栄養情報を」

作物が乏しく、貧しい家庭の多いマダガスカルの村落部で、栄養改善に取り組む菅沼さん。目の前の母と子へのアプローチだけでなく、継続的な栄養改善の土台づくりを目指して、あらゆる切り口で活動を展開中だ。



する保健局。菅沼さんはそのうちの一つであるベロバカ基礎保健診療所で主に活動している。「保健局の管轄地域の総人口は約7万人で、その多くが貧困下にあります。食料不足や知識不足などにより、栄養不良や体重増加不良の子供が多く、栄養改善が課題です」

対策が必要なのにも関わらず、地域での栄養改善の取り組みは十分ではない上、保健局ではそもそも栄養不良児の数が把握できていなかった。そこで、菅沼さんは栄養不良児の特定から始めた。「そのためには、まず体重測定が必要です。妊婦健診や小児予防接種のために診療所に集まった母親に栄養指導を行い、病気の有無に関わらず、来院した子供ものの体重を毎日記録しました」と菅沼さん。同時に、母子手帳に掲載されている成長発達曲線の見方なども丁寧に説明し、母親への啓発と栄養に関する知識の向上に努めた。

菅沼さんの活動を支えるのは、地域を巡回して診療所外で5歳以下の子どもの体重測定や家族への栄養指導を行う「栄養保健ボランティア」だ。しかし、ベロバカ基礎保健診療所が管轄する行政区7つに対して、その数は2人。人手を補うため、菅沼さんは栄養を専門としない保健ボランティアたちにも各行政区での子どもの成長確認の協力を呼び掛けた。こうして、これまでは人手が足りなかった2つの行政区で新たに体重測定が開始されたという。

包括的な栄養改善に 新たな協力者

活動の中で明らかになってきたのは、ベロバカ地域では妊婦の体重増加傾向や新生児の出生体重に問題はなく、母乳だけを与えている生後6カ月までは、子どもの適切な体重増加が見られるということ。「でも、その後、年齢が上がるにつれて、基準値から体



a. 保健ボランティアと診療所外での体重測定。基準となる体重を下回る子供がとても多いという
b. 2009年当時の青年海外協力隊が保健省などと協力して作成した「栄養改善キット」を使い、保健ボランティアと村の妊婦向けに栄養について指導する菅沼さん
c. 「健康やかに育ってほしいと切に願っています」と菅沼さん。授乳法の指導なども行う
d. マジンガ郡の村落部では、市街地から離れると食糧が手に入りづらい地域も多い。菅沼さんは、家庭で育てやすく、栄養価が高い植物「モリンガ」に注目している

重が懸け離れていくんです。つまり、離乳食の開始後の対策が鍵になるのです」と考察する菅沼さん。このことを踏まえ、菅沼さんは離乳食の適切な開始時期と内容について、母親たちに念入りに指導している。

菅沼さんは、定期的に各行政区に出向いて保健ボランティアたちの活動状況を確認したり、自ら母親や家族に栄養指導を行ったりするという。住民を集めて実施する調理のデモンストレーションは好評だが、課題もある。「家庭で生かせる栄養知識を伝えるため、安価で地産、かつ栄養価の高い食材を選んでいます。活動の継続には、食材の持参など住民の協力が欠かせません。でも、経済的な理由や活動への理解が行きわたっていないために、協力を得ることは簡単ではなく、一層工夫が必要だと感じています」

住民にとって真に有益な情報を提供したい。菅沼さんは出産などで診療所に寝泊まりする人が持ち込む食事や、町で子どもが手にしているおやつなどを観察したり、個人の話に耳を傾けたりし、そこから集団への栄養指導の手掛かりを得ようと地道な努力を重ねた。「これまで、栄養改善の活動は個人的に協力を得ながら細々と続けてきましたが、先日、保健局長から郡内全体の栄養改善に向け、現状と解決策をまとめてほしいと言われたんです。そう話す菅沼さんは、現在、活動拡大に向けて、目標設定や資料の準備を進めている。

菅沼さんが目指すのは、目の前の母と子へのアプローチだけでなく、栄養改善の要である診療所や無償で働く保健ボランティアが無理なく活動を続けていけるようなシステム作りだ。地域の現状を正しく把握し、継続的に栄養改善を図る上でこのことは欠かせない。

「住民やボランティアなどと会える一回一回のチャンス大切にしています」。そう話す菅沼さんの周りには、栄養改善の協力の輪が着実に広がっている。